大賞

大切ないのち

秦野市立南小学校　三年　柏　遥稀

「ドク、ドク、ドク。」

心ぞうの音が聞こえます。おなかの中の赤ちゃんが、生きている音です。

わたしは、花田先生がしてくださった「いのちのじゅぎょう」の中で、ちょうしんきでおなかの赤ちゃんの心ぞうの音を聞いたことが、一番心にのこりました。おなかの中の音なので、少し小さい音でした。その音を聞きながら、顔は見えないけれど、目の前に赤ちゃんがいるのだと思いました。何だかとてもふしぎなかんじがしました。生まれたら、もう一ど、赤ちゃんの心ぞうの音を聞いてみたいです。こんどはもっと大きくてしっかりした音が、聞こえる気がします。

わたしにも、六さい年下の妹がいます。その妹が、お母さんのおなかの中にいたとき、よくおなかをなでていました。すると赤ちゃんが、中からポコッとおなかをけったりすることがありました。まるで、おへんじをしてくれているみたいでした。それから、

「生まれたら、いっしょにあそぼうね。」

と、話しかけたり、家族で、赤ちゃんの名前を考えたりもしました。赤ちゃんのことを考えていると、とてもやさしい気もちになりました。この気もちが、「いのちを大切にする」ということなのだと、今は思います。しばらくして、妹が生まれました。はじめてだっこしたときは、あたたかいなと思いました。手も足も、わたしの手のひらで、すっぽりつつめるくらい小さくて、かわいかったです。わたしの人さしゆびを近づけるとぎゅっとにぎってくれました。妹が、生まれてきてくれて、とてもうれしかったです。

「いのちのじゅぎょう」をうけて、いのちを大切にして、けんこうてきな生活をおくりたいと思いました。また、いのちを大切にするということは、みんなのことを大切にすることだと思います。だから、これからは、もっと人にやさしくしていきたいです。

教育委員会委員長賞

みんな、生きている。

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校
一年　佐藤　菜花

「一緒に死んでくれ」もしも、自分が親にこう言われたらどんな気持ちになるだろう？

道徳の授業時に講演に来られた利光さんは、子どもの頃、実の親からこの言葉を言われたという。利光さんは幼少時に脳性麻痺となり、身体を自由に動かせなくなった障がい者の方だ。きっと利光さんの親は子どもの将来を考えて不安になり、親子心中をしたくなるほど思いつめてしまったのだろう。しかし、親も辛かっただろうが、利光さんはもっと辛かったと思う。なぜなら、生きていても将来あなたは幸せになれない、ということを一番身近な大人から宣告されたのだから・・・。それは、「あなたは生きている価値がない」と言っているようなものだ。

その後、利光さんはいろいろな苦難を乗り越えて二十歳で自立し、結婚もし、お子さんもできたそうだ。利光さんの親はきっと、昔「一緒に死んでくれ」と言ったことを後悔しておられると思う。確かに、障がい者が自立して生きていくには私達には想像もつかないほど大変なことだと思う。でも、今、利光さんは家族を持って幸せに暮らしておられる。そして、こうやって自分のことを包み隠さず話してくださることによって私達にも勇気や笑顔を下さっている。

私は、どんな人間でも「生きている価値のない人間はいない」と思う。だから、どんなに今の状況が他人から見て不幸に見えても、その人がずっと幸せになれないだろう、なんて誰も決めつけてはいけないと思う。私は、利光さんのお話しを通して、この地球上の人たちの命すべてが可能性のある尊いものだということに気付くことができた。

利光さん、ありがとうございます。

神奈川新聞社賞

赤ちゃんになったひいじいさん

寒川町立小谷小学校
二年　ヴェレズ　アルセリオ　寛

ぼくのファミリーにはひいじいさん、ひいばあさん、アメリカのグランパ、グランマ、それに日本のじぃじとばあたんがいます。

ひいじいさんはいま、びょういんにいます。ぼくがいくとうれしがります。できることはジャンケンだけです。口からたべることも、はなしをすることも歩くこともできません。ひいじいさんのかおをみてぼくがかんじるだけです。ぼくはいろいろできることがふえていくのに、ひいじいさんは、どんどんわすれてできなくなっています。とてもかなしくなります。ぼくがかえるとき、大きなこえでないたときは、びっくりしました。年をとると赤ちゃんにもどるとばあたんからききました。ひいじいさんが今、何を思っているのか、どうしたいのかがわかればいいなと思っています。ぼくにできることは、なにかかんがえてみました。あいにいっていっぱいスキンシップしたり、ジャンケンをしたいと思います。またへんじがなくても、たくさん話をしてあげたいと思っています。ぼくたちみたいなこどもがいくとほかのしらないおじいさんやおばあさんも、はなしかけてくることがあります。げんきになるみたいです。ぼくはげんきのもとになっているのです。アメリカのグランパにはスマホではなしました。からだのちょうしがわるくねています。こえでげんきのもとをとどけることができました。ぼくはみんなのえがおを見たいです。

テレビ神奈川賞

感謝の意味

県立相原高等学校　三年　中丸　千晴

普段、毎日欠かさず私たちが口にしている食べ物に「いただきます」「ごちそうさま」と言う言葉は当たり前です。ですが、それは本当に気持ちを込めて言っているのでしょうか。私は今まで料理を作ってくれた人に対してだけの気持ちしか考えていませんでした。しかし、相原高校に入学し、食の大切さや命の大切さを改めて学ぶことができました。ここでは牛、豚、鶏を飼育し、野菜も育てて収穫しています。毎日が放っておけない命でありそれは野菜一つにしても種をまいただけでは立派に育ちません。水やりや除草をし、そこには人の手助けと太陽の光や雨などの自然からの恵み、そして愛情が必要です。そのおかげで肉や乳や野菜などを得ることにより、人間の生きるための栄養となります。

家畜とは人間が生きていくために与えられた命であり、いつも何げなく食べているお肉はその命を頂いて食べています。毎日、休みなく大切に育ててきた牛もいつかは出荷します。出荷トラックが到着し、牛を誘導してトラックに乗せようとしますがなかなか乗ってくれません。牛はこの先何が待つのかをわかっているのかトラックに乗ることを拒みます。ですが、そのどうにもならない抵抗や悲しみをも押し殺しトラックに牛を乗せます。そして私たちは牛に手を振り、遠ざかってゆくトラックを見つめながら次に会える時のことを考えます。何日か過ぎると立派な精肉となり私たちの元へ戻ってきました。初めは食べることにためらいがありました。しかし、家畜の目的を思い起こし、また、心を込めて育てあげた今までの日々を見つめ返すと全部残さず食べたいと思いました。そしてこのおいしい精肉を大勢の人に食べてもらい、おいしそうな、幸せそうな顔を見たいと思いました。

このような経験を通して命の重さや大切さを知り、「いただきます」の本来の意味を学び、知ることができました。

神奈川県ＰＴＡ協議会会長賞

命の学習をして

伊勢原市立高部屋小学校　四年　長嶋　心智

「まだまだ電池がのこっている！まだまだ生きられる！」こんな勇気が私の心の中に、ぐっと湧いてきました。「命」という詩を読むまで、私は命というものが、こんなに大切だと思ったことはありませんでした。私にとって、学校へ行き、勉強し、友達と遊ぶ、という毎日の生活は当たり前になってしまい、「つまらない」と感じることさえ時々ありました。しかし、この詩を書いたゆきなさんは、病気によってこんな当たり前の生活も送れなかったと知り、今自分がどれだけ幸せなのか、あらためて気づきました。わたしのふつうは、ゆきなさんにとっての幸せ。わたしの幸せは、ゆきなさんにとっての夢なのです。

ゆきなさんの詩の中で、私が気に入ったところは、「私は、命が疲れたと言うまで、せいいっぱい生きよう」というところです。

もしこれから、つらいことがあって逃げ出したくなったら、私はこの詩を思い出して「今していることは、とても幸せな事」と考え直して、そのつらさに向き合いたいと思います。毎日おいしくごはんを食べ、家族や友達と笑いあえる、こんな当たり前の生活が幸せ、今生きていることが、私にとって最高の幸せだからです。

そして、この勇気をくれた詩と共に、自分の命を大切にしていきたいと思います。わたしは今、生きる勇気をくれたゆきなさんに、こう伝えたいです。「がんばって生きてくれてありがとう。この詩を書いて、わたしに届けてくれて、ありがとう。」

優秀賞

命の大切さ

伊勢原市立高部屋小学校　五年　塚本　ひかり

私は、命の大切さについての勉強をしました。そこで三つの大切さに気付きました。そしてネイティブアメリカンで言い伝えられている言葉が心に残りました。

一つ目の命の大切さは、産んでくれた人がいる。ということです。約一年間お腹の中にいる私を、大切に大切にしてくれて、産まれてからも私を大切にしてくれています。だから私は、命を大切にしないとなと思いました。

二つ目の命の大切さは、たった一つしかない命だということです。人生は一回しかないから、幸せに、そして楽しく生きようと思いました。時には、ケンカしたりイライラしたり悲しい時もあるかもしれないけど、同じ時間はもう二度こないから、つらい時も笑っていようと思いました。

三つ目は、悲しんでくれる人がいるということです。だから死ぬ直前まで、みんなと笑って楽しく死んで、自分が天国にいっても、あまり悲しまないでほしいです。悲しんで泣いていたら、自分も悲しくなってきて天国にいけそうもないからです。だから私が死んでも明るく「バイバイ」と言って笑っていてほしいなと思いました。

最後にネイティブアメリカンの人達に言い伝えられている言葉についてです。それは「あなたが産まれたとき、あなたは泣いていて周りは笑っていた。でもあなたが死んだとき、周りが泣いていてあなたは笑っているような人生を歩みなさい」です。一番心にひびいた言葉は、「あなたが死んだとき、周りが泣いていてあなたは笑っているような人生を歩みなさい」です。理由は、周りに優しくしてたよりにされて、満足な人生を送ろうと思ったからです。

だから私は、今回の授業で命の大切さについて学ぶことができました。

優秀賞

おいしい命

平塚市立大野小学校　六年　村田　将輝

ぼくがいったキャンプでのくんせい作りの思い出がいまでも残っています。

そもそもくんせいということがよく知らないぼくにとってはしょうげきなことがありました。魚のぞうきをとることです。最初は楽しみにしていたのにだんだんいやになっていきました。だけど、教えてくれていた人のある言葉でぼくの気もちが変わりました。それは「体をはって死んでくれたんだ、食べなかったら、むだ死にじゃないか」という言葉です。

ぼくは覚悟を決めぞうきをとりのぞき、くしをさして、焼きました。そして、くんせいができあがりました。

ついに魚を食べる時がきました。うすい茶色になった魚を一口たべました。「なんておいしんだろう。」と思ってからは、食べるのを止められないほどおいしかった。さっきまで生きていた魚はもうぼくの体の中にある。だけど、一つ悲しかったです。それは、あの魚の開いた大きな瞳はたとえ息がなくても輝やいていて、そして、その魚のはらを切る、ほんのりつめたいその体にはすこしあたたかさを感じた。気のせいかもしれないけど、感じた気がしました。さばいているときは悲しくて目がなみだ目になっていました。なぜか、悲しかったのです。でも完成したくんせいは、むだ死にではなくぼくの体の一部になる魚はおいしい命だったと思います。

すごくおいしかったのです。

このようなできごとが本になっているお話があります。それは「いのちをいただく」という本です。これは、道徳の時間の時にやりました。この話をきいて

「ああ、ぼくと同じだな。でも、またやりたいという気持ちにはないなあ」

と思いました。

命はいただくものであり、感しゃするものであります。これ以上おいしいものはありません。おいしいおいしい命でした。

優秀賞

心で命を考える

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校
三年　福島　陽

私は先日学校の道徳の授業で、利光徹さんという重度の脳性マヒがある男性にお会いする機会がありました。

絞り出されるような声で語られた、彼の人生やエピソードは私の想像をはるかに超えていました。そして改めて「いのち」とは何かを考える機会となりました。

利光さんのお話の中で、「一緒に死んでくれ」と両親に言われたという物があります。当時利光さんは十五歳。私と同じ年齢です。それもあって、私はとてもそのお話にショックを受けました。私は今、中学三年生として毎日充実した生活を送っているし、死ぬなんて考えたこともありません。それに対し利光さんは自分の生きている理由について悩み、こともあろうに両親からの提案の死を考えていたのです。

そのことを知って私は、生きていることは当たり前ではないんだと気付きました。それまでの道徳では、ただ「命は大切」と言っていれば良いという感覚でした。身近な人の死も経験したことが無いし、振り返ってみれば、本当に心から命のことを考えたことが無かったのかもしれません。

今、子供までもが自殺をしてしまったりするなど命を軽く考える人が増えていると思います。命は大切と学校で教わっていても、心からその事を感じられる機会が少ないからではないでしょうか。

だから私は、この経験で得たこの感覚を一生忘れません。そして自分の子供や周りの人にこのことを広め、少しでもいのちの大切さを、形式的にではなく本質的に、より多くの人が理解してほしいと思います。

優秀賞

命の大切さ

相模原市立相模台中学校　一年　石川　菜々子

私が通う相模台中学校では、一学期に命についての授業があり、その中で「生命のメッセージ展」が開かれて、大学生になるはずだった息子さんをなくした鈴木共子さんのお話をきくことができました。

私は鈴木さんのお話を聞いて、涙が止まりませんでした。鈴木さんの息子さんは無免許で飲酒運転をしていた車にはねられ、一瞬にしてこの世を突然去りました。やっと合格した大学の授業を一度も受けずに母親の鈴木さんにお別れの言葉も言わずに帰らぬ人となってしまったのです。私は、その運転手を絶対に許せないと思いました。

私たちは毎日を当たり前のように過ごしていますが、決してそうではありません。鈴木さんの息子さんのようにある日突然命を奪われてしまう人もいるのです。

「命」とは「生きている」ということです。「生きている」とはどういうことなのか「命」はどこにあるのでしょうか。よーく深く考えても私は心臓が動くことくらいしか思いつきませんでしたが、「いのちのおはなし」という日野原重明先生の本を読んで、「命」は「みんな一人一人が持っている時間」だということがわかりました。

この大切な時間を戦争やいじめ、事故などで勝手に奪ってしまってもいいのでしょうか。いいはずがありません。

国語辞典に「人権とは人間が生まれながらに持っている生命、自由、平等などに関する権利」とあります。

この人権を尊重しなければならないことは大人なら誰でもわかっているはずなのに世界では戦争が終わらない。自分たちの欲のために人を殺し合う人間はおろかです。

おろかな大人になる前に、人の痛みや悲しみに気がついて相手の立場になって物事を考えられるようになりたいです。

優秀賞

講演会を聞いて

横浜市立生麦中学校　三年　武井　舞音

昨日のお話を聞くまでは、元気に生まれてくる赤ちゃんの方が多いと思っていたけど、現実には、早産や、生まれつきの病気、障害などがあって生まれてくる子もとても多いと初めて知りました。また、ＮＩＣＵという、赤ちゃんの集中治療室があることも初めて知りました。そして、お話の中に出てきた、様々な赤ちゃんの病気についても初めて知る事が多かったです。

特に、「一過性白血病」という病気におどろきました。なぜなら、今まで白血病とは、小児や大人など、生まれてから時間が経過した後になる病気かと思っていたけど、生まれつき持って生まれてくる事もあるんだな。とおどろいたからです。また、ダウン症も別の名前があり、ダウン症の中でも、助かる確率がかなり少ない重度のものもあるというのも初めて知り、びっくりしました。

先生がおっしゃられた「生まれてきた子供に罪はない。」という言葉が特に心に残っています。子供になにか異常があると分かった時に、産むのをあきらめる事を選択する人も多いと思うし、前までは、もし自分の子がそうだったら・・・と考えると自分もあきらめる選択を選んでしまうかもしれない。と思っていたけど、今回の講演会を聞いて、授かった命を無駄にしてはいけないと改めて分かりました。それと同時に、重い病気や障害などがある子供達のお母さん、お父さんの強さにもおどろいたし、自分も将来、そんな強い大人になりたいと思いました。

様々な人々と関わり、助けられない命とも真正面からぶつかり、日々多くの命と向き合い、救っている豊島先生はとてもすごいと思ったし、これからも多くの子供達の将来を輝かせてほしいと思うと同時に、ＮＩＣＵに入ってくる子供達が少なくなるように願っています。

とても貴重なお話が聞けて本当に良かったと思います。

審査員特別賞

命の授業をきいて

洗足学園中学高等学校　二年生　金田　梨沙

今回の命の授業で先生は障がい者を差別する世の中を変えてほしいとおっしゃっていました。私は、今の人々は差別というのを勘違いしているのではないかと思います。

私は八歳までアメリカに住みアメリカの教育を八年間受けてきました。アメリカでは障がいのある生徒でもパソコン教室や図工の時間、読書の時間、昼食の時間などできる限り生徒と障がいのある生徒が一緒に過ごす時間を長くしようと心がけていました。そのため、これといった差も感じることはありませんでした。

一方日本の教育は、全ての時間を別々に過ごします。受ける教育も異なります。日本はこれをその障がいのある生徒に合わせた教育を行っていると思っているのかもしれません。ですが、別の教育を受けさせていることも差別なのではないかと私は思います。それがこの世の中の差別を生み出しているのではないかと。

小学生から中学、高校生で学んだことはその人が大人になる土台だと私は思います。その土台が今の差別を生み出しています。ならば教育を変えればその土台も変化し差別のない世の中を作りあげることができます。その土台を変えるという使命を私たちの世代が持っているのだと思います。

先生の授業で特に心に残っているのは、「普通に生まれてきたのは奇跡だ。」という言葉です。今の私たちはもっと周りの間違ったことに気づくべきだと思いました。